

第4回文化施策に関する市民懇話会 議事録

R7.2.19 高岡市役所 803 会議室

出席者：荒井委員、有田委員、筏井委員、伊豆委員、中川委員、浜野委員、藤田委員、
山本委員（五十音順）

1. 高岡市の文化施策に関する意見要旨 ⇒ 事務局から説明

2. 委員意見等

（1）芸術文化活動の意義について

委員：やがえふは地元の子どもたちが1度は踊ったことがあるはず。経験した人たちがその後も継続して参加しやすい環境を作らないといけない。獅子舞に限らず、伝統芸能は担い手不足になっている。社会全体が少子化なので仕方ない部分もある。他の文化を知る、コラボする場があってもいいかと思う。市内で開催されるイベントを見ていると、ほかの自治体から来た人たちが積極的に仕掛けているように思う。高岡の人が消極的というわけではないが、文化に対する意識は高いのに、自ら参加するという点においては意識が薄いように見える。

委員：本来は、事業費を受益者負担として入場料を設定すれば、補助金に頼らずとも入場料やスポンサー収入だけで賄うことができる。ただ、そのためには市民の皆さんが芸術文化を楽しむためには受益者負担が必要だという土壌作りが必要になってくる。払う対価に見合う感動や生きがいが自分に享受されるということを理解してもらわなければ実現はしない。

委員：入場無料としている公演をよく見かけるが、そうすると、申し込んだとしても、当日やっぱり行かないという人が一定数出てくる。芸術は価値あるものとして、相当の金額を支払うことでお客さん自身の芸術に関する価値観を育てることに繋がる。お金を払うからこそ得られる価値・体験があるはず。

（2）子どもに対する文化施策について

委員：高岡市の多くの人が、子どもが文化に触れることが大事だと感じている結果が心に残った。その気持ちを今後の活動に取り入れて、何かに活かしていけたらと思う。地域に根付いた伝統として御印祭があるが、あくまで地域だけのお祭りという雰囲気になってしまっているのがもったいない。富山市の「おわら」のように、踊りはもとより、その背景も含めて高岡市全体に広まってほしいと願う。

委員：公演を実施する際に、感性の豊かな子どもになってほしい、何かひらめいてくれたり琴線に触れてくれたりしてくれればいいなと思って、子どもに対してアプローチすることが多い。だが、実際やりたいのは大人の方かもしれない。御印祭でいうと、子どものころに練習して踊れる人が、参加したくてもその場がないとなってしまうと、まちの人たちは一步引いてしまうかもしれない。文化施策の中で、大人も一緒に参加するというアプローチもあっていいと思う。

委員：文化体験というのを企画しても、年配の女性は多く来るが、子ども連れの人たちにはあまり参加してもらえない。子どもの作品展示というのはすごくニーズがある。体験企画に関して思うのが、無料で体験できると人は多く来るが、楽しかったという思いだけで終わってしまうことがある。楽しく体験してもらうことを目標にするのも悪くはないが、小学生を相手に体験イベントを実施したときに、その後の継続性というのが見えにくい。高校生くらいの年代であれば、一度体験することでその後も継続してくれる可能性が高い。高校生を対象にすると、学校の先生の負担が大きくなってしまうという懸念がある。過去には授業の中で伝統文化を学んでいたが、今はそういったクラブ活動がほとんどない。もし、実現したとしても、顧問の先生、校長先生によって各学校で技術や熱量の格差が出てしまうという課題もある。

委員：子どもたちにとって連続的に学ぶ場がもう少しあると、伝統文化がこれから先、何十年も続いていくことによって良い影響があると思う。現在行われているものづくり・デザイン科などの取組を通して、学べる場というのは作っていただけているが、それがさらに学年を経ても繋がっていくものとなれば、子どもたちにとって、自分のアイデンティティに落とし込むことができるのではないかなと思う。例えば、海外の姉妹都市の子ども達と交流する際に、高岡の芸術文化について英語で話してみるなど英語教育を組み合わせることで、連続的な学びの場としてほしい。

これまでの4回の懇話会を通して、親自身が知らないことが多いと感じた。親自身が学んでいける仕組みが作られると子どもにとっても良い影響となる。

委員：ものづくり・デザイン科については、高岡では当たり前でも、他市町村ではやっていないことだということを教えてあげなくてはいけない。子ども達がそのことを誇りに思ってもらえるような意識作りができれば、伝統工芸などに関して子ども達の見目が変わってくるはず。その結果、まちで行われる祭り、イベントにも興味を持ってくれる流れができる。

(3) 文化施設のあり方について

委員：今年の「GEIBUN」で実施したシンポジウムで、文化財をテーマとして豊田市博物館館長にお話しいただいた。豊田市博物館は、「みんなでつくりつづける博物館」をコンセプトにしており、館長は昔から文化財レスキューをされている方。文化財を守る意義として、震災等から復興する際に、その地に文化がなければ人は戻ってこない、文化財を守ることが結果的に人を守ることに繋がるという考えをもっておられる。そういった考えから、豊田市博物館は今までの博物館のあり方を考え直し、市民の人たちが集まる施設を目指しているとのことだった。高岡市はこれまで歴史や文化を繋いできたが、新たな文化を創り上げていくためには、そういった活動を醸成できるような仕組みが必要になってくる。施設のあり方をどう定義していくかということがこれから非常に大切になってくる。

委員：美術館博物館というのは、現在は見せる施設だが、今後はアクティブな、能動的に市民が関わるような、人が集まるような施設になっていくことが理想である。

委員：文化施設のあり方に関してアンケート結果では、文化施設を統合させる、数を減らす回答が多く見られたが、高岡市には市民会館がなく、周辺市町村の施設は築年数もたっており、変革期を迎えている。富山市や石川県に大きなホールがあるので、高岡市に無理に建設する必要はないとの考えもあるが、公演をする側としては、ホールの利用が順番待ちもしくは抽選になってしまうという実情もある。現段階で、施設の数を減らしていくと決めるのではなく、建設予定のテクノドーム別館の新しいホール機能を見極めながら考えていく必要がある。

委員：後々の維持を考えると、未来の子ども達に負担を残すことは望ましくないという現実がある。

委員：劇場やホール機能のみの施設ではなく、子どもから大人までいろいろな世代が集まり、様々な体験もできるような、公民館的なコミュニティ機能を持った施設となると、議論の仕方も変わってくると思う。

委員：数を減らすという表現・流れではなく、従来の考え方を見直して、新しい発想を取り込んでいくが必要になってくる。

(4) 時代に応じた変化

委員：「他市、他県出身者の目線から、高岡には他地域と比較して豊富な文化がある」というのは、高岡市が誇るべき点である。義務教育、高校で高岡の文化を学ぶ機会をもっと多く取るべき。そうすることで高岡の豊富な文化があたりまえでない

ことが分かる。

また、伝統や文化は、ただ守るだけではなく、時代に合わせて変化していくことも必要だと思っている。高岡市には、富山大学芸術文化学部もあり、伝統と革新が常にある特異な地域である。

委員：城端のイベントでは、最後に来場者みんなが自由に参加することができる。そう
いった仕組みは面白い。参加・体験することに意義を感じる時代であり、舞台等
においても観るだけでなく、観ている人もその場で参加して、出演者と観ている
人が一体なれる仕組みがあるといいのではないか。伝統芸能は、やってみたいと
思ってもできる場がなかなかなく、一歩踏み出すことが難しい。

委員：御車山祭りを例にあげると、この祭りは参加型とは言えない。現在は曳き手の確
保に苦労しているが、かつては、曳かせてほしいと言われるくらいであった。時
代の流れと文化の価値が変わっていくので、伝統芸能を継承することも大切だが、
その伝統を変えていくことを受け入れていくのも大切かもしれない。

委員：守るべきものは時代で変わっていく。常に同じことをやっていてはいけない。地
域の活動も同じで、年齢構成などに見合った活動をしないといけない。最近新し
く引越してきた人にはあまり参加してもらえない傾向にある。神輿や獅子舞に興
味が無い、近所付き合いが希薄になっているなど考えられるが、時代に合ったや
り方を見つけていく必要がある。